立ち読み版

恥辱の風習

捧げられた新妻

天草白
挿絵／ロッコ

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　強いられたフェラチオ奉仕……4
第二章　過ちの一夜に盗まれた貞操……56
第三章　宴の席で背徳の3P……95
第四章　熟妻は淫らな性奴隷……145
第五章　終わらない輪姦祭り……181
第六章　夫の前で捧げられた新妻……233
エピローグ　恥辱の風習……282

登場人物 *Characters*

川崎 瑞穂
（かわさき みずほ）

二十五歳の新妻。短い黒髪とGカップ巨乳が映える、清楚で温和な美人。結婚を機に夫の田舎である稲盛村に引っ越してきた。

畑野 彩香
（はたの あやか）

川崎家の隣家の人妻。切れ長の瞳とグラマラスな体形があいまって妖艶な雰囲気を醸す三十六歳。数年前に瑞穂と同じく結婚後に稲盛村に引っ越してきた。

川崎 正一
（かわさき しょういち）

瑞穂の夫。子供の頃から稲盛村に住んでいた。

郷田
（ごうだ）

毛深くがっちりした体形の、好色な四十過ぎの男。川崎家の、畑野家とは逆側の隣に住む。

第一章　強いられたフェラチオ奉仕

川崎正一は暗闇の中にいた。

周囲は無数の篝火で赤く照らされている。その照り返しを受けて、いくつもの白い肌が艶めかしい光沢を放つ。生々しい汗の匂いを発散しながら、何組もの男女が裸体を絡ませ、ぶつけ合っていた。

――汗で滑る尻を抱えこみ、後背位で人妻を犯す老人。

むっちりとした雄大な尻の谷間に、枯れ木のような体に不似合いな太いペニスを潜りこませ、勢いのいい抽送とともに、ぐちゅ、ぐちゅ、と結合部から欲望の飛沫を散らしている。

人妻は不倫の背徳感に浸るかのように眉間を寄せ、エクスタシーの嬌声を連続して響かせる。

老人は気持ちよさそうに喉を鳴らして呻きながら、なおもバックピストンを繰り出した。

――立位のまま互いに腰を打ちつける少年と少女。
少女の未成熟な乳房が少年の胸板に押し潰され、引き締まった腰は抽送のたびに細かな震えを起こす。
まだあまり経験がなさそうな肉づきの薄いクレヴァスは限界まで拡張され、太い肉根を呑みこんでいた。
ぱん、ぱん、ぱん、ぱんっ。連続してぶつかる腰と腰がリズミカルな肉音を発する。思春期特有のしなやかな裸体と裸体を擦り合わせて激しく交わる様子はまるでスポーツのように爽やかで、それでいて淫靡だ。

――熱烈なキスをしながら騎乗位で交わる熟女と若者。
肉づきのよい豊満な裸体で自分より二十も年下の青年にのしかかり、その熟女は腰を振りたくっていた。
量感たっぷりの乳房がダイナミックに揺れ、弾む。
下になった青年は熟練した腰遣いに呻きっぱなしで、いつ射精してもおかしくないといった様相だ。

至る所で繰り広げられる乱交シーンの向こうには、縦長の神輿(みこし)が置かれていた。先端部が赤黒く張り出したそれは男根を模した淫靡な形状をしている。
その周囲で舞い踊る巫女はいずれも肌が透けるほど薄い巫女衣装をまとい、よく目を凝らせば豊かに膨らんだ胸の頂点に赤い尖りを確認できた。
巫女の一人が神輿に取りつき、まるでフェラチオをするかのように、神輿の先端部――ペニスでいえば亀頭に当たる部分に口づけし、ときにはねっとりと舌を這わせて上気した顔で喘いだ。
と、
「はぁっ……あっ、も、もっと……ぉっ……！」
どこからか、一際大きく聞こえてくる喘ぎ声に正一はハッとなった。
彼がよく知った者の声だ。
そしてそれは、永遠の愛を誓い合った女性の声だった。
慌てて周囲を見回し、声の出所を探す。
声は、乱交する男女の中心――折り重なった肉の狭間から聞こえてきた。
「まさか……」

信じられない、嘘であってくれと思いながら、彼は弱々しく歩みを進めた。
嘘だ。あり得ない。彼女がそんなことをするはずがない。
不安と焦燥に突き動かされ、彼は進んだ。
誰もが一心不乱に目の前の相手と交わり、肉の悦楽を追求し、彼の行動など気にも留めない。
そんな中、一歩、また一歩。
そこにたどり着くまでのわずかな距離がもどかしい。
「どうして――」
重い足取りを進め、ようやくその場所に到着した正一は愕然と呻いた。呆然と目を見開き、その光景を見つめる。
口で男根を美味そうに頬張り、膣には男根を根元まで呑みこみ、尻穴にまで男根を受け入れていた。
さらに両の手で二本の男根を扱きながら、順番待ちをしている男たちに向かって淫蕩な笑みを浮かべる。
無数の男たちに身を委ね、白濁した体液に染まったグラマラスな裸身を妖しくくねらせる妙齢の女。

それは、彼の最愛の妻の姿だった。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

正一は布団から上体を起こし、荒い息を吐き出した。

心臓が破れそうなほど鼓動を速めている。

「……夢か」

深いため息とともに、それだけの言葉をやっと吐き出した。

隣で眠る美しい妻に目を向ける。

彼女――瑞穂はすやすやと安らかな寝息を立てていた。

「なんて馬鹿げた夢を見たんだ、僕は」

自分で自分に苦笑する。

悪夢を見たショックが急速に薄らぎ、代わりに喜びと期待が込み上げる。

明日は記念すべき日なのだ。

そう、彼女と一緒に故郷での新婚生活が始まる日だった。

川崎瑞穂は二月の澄んだ空気を胸いっぱいに吸いこんだ。

都会とは空気の清らかさが違う――そんな実感が心地よい。
周囲には高層ビルもアスファルトの道路も雑然とした人ごみも何もない。
あるのはまばらに点在する家々、どこまでも広がる田んぼ、砂利道という牧歌的な田園風景だった。
昨日まで住んでいた都心部と違い、こちらでは夜のうちに雨が降っていたらしく、足元にはいくつも水たまりができていた。
そこに映っているのは、春の木漏れ日を思い起こす暖かな雰囲気を漂わせた二十五歳の美貌だ。
肩のところで切りそろえた黒髪が風に吹かれてリズミカルに揺れる。
清らかな容姿とは裏腹に、フリルをあしらった白いブラウスの胸元は淫靡なまでに豊満な膨らみを示し、見事に盛り上がっている。そこから腰に向かってまろやかなカーブを描きながら理想的なくびれを体現していた。
柔らかな素材でできた膝までの青いスカートが爽やかな風に吹かれながら、美しい曲線を形作る双尻にまとわりつく。布地越しに浮かび上がる理想的なヒップラインは乙女さながらの締まりと、若妻ならではの肉づきのよさを兼ね備えていた。
「素敵な場所ね、あなた」

瑞穂は水たまりに映った自身の姿から隣にいる夫の正一へと視線を移し、黒髪をかき上げながら柔らかな微笑を浮かべる。
「瑞穂が気に入ってくれてよかったよ。慣れない土地について来てくれてありがとう」
「お礼なんてよして。あなたと一緒なら私はどこにでもついて行くわよ」
瑞穂は笑みを深めて惚気てみせた。他愛のない会話の節々に夫への愛情を示したくてたまらないのは、まだ結婚してから三か月という期間のためかもしれない。まだまだ恋人気分が抜けきらないのだ。
正一も同じ気持ちなのか、嬉しそうな顔でうなずいてくれた。
と、その顔がかすかに青ざめていることに気づく。
「どうしたの、あなた？　少し顔色が悪いみたい」
正一はギクリとしたように顔をこわばらせ、
「……なんでもないよ。昨日ちょっと変な夢を見ちゃってね」
「夢？」
「いや、本当になんでもないよ。ごめんごめん」
首を振った正一はすでにいつも通りの笑顔だった。
「さ、行こうか」

二人は都心のマンションを引き払い、ここ稲盛(いなもり)村に引っ越してきたばかりだ。今から隣家へ挨拶に向かうところだった。
家の門の前には、舗装されていない砂利道が一直線に走っている。その向こうから一人の女性が歩いてきた。
買い物籠を片手に持ったその中年女性は、こちらを見て驚いた顔になった。
「正一くん？　大きくなったわね？」
「ご無沙汰しています、藤野(ふじの)さん」
正一は丁寧に頭を下げた。
「もしかして、そちらは奥さんかしら？」
「初めまして。正一の妻で、瑞穂と申します」
瑞穂は一礼して会釈する。
「……あら、ようこそ。藤野です」
なぜか一瞬の間を置いて彼女――藤野夫人は挨拶を返した。
「正一くんはうちの子供と幼なじみで、よく遊んでもらったのよ」
説明をしながら、ちらちらと瑞穂を見る。
転入者に対する好奇の目……とも違う。

かといって、田舎特有の新参者に対する警戒でもない。
豊かに盛り上がった胸元から美しいS字カーブを描く蜂腰、そして健康的な色香を醸し出す臀部までを舐め回すように何度も見る。
まるで彼女への査定だ。
（どうしたのかしら？）
訝る瑞穂に対し、藤野夫人はすぐににっこりとした笑顔になり、
「これからもよろしくね。慣れない環境で色々大変だとは思うけど」
慣れない環境――。
瑞穂はその言葉を胸に刻む。
今まで都心部に住んでいた瑞穂は、結婚を機に夫の田舎であるこの村に引っ越してきた。
夫の両親はすでに他界しており、二人っきりで新婚生活を送ることになる。住まいとなるのは正一が両親から相続した和風の一軒家で、二人だけで暮らすには少々広すぎるくらいだ。
藤野夫人が去ると瑞穂は正一とともに隣家に向かった。
隣家といっても瑞穂の家とは十メートル以上離れている。都会の感覚からすれば、

隣家という言葉を使うのも抵抗を感じる距離だ。
『畑野』と表札がかかった一軒家にたどり着き、呼び鈴を鳴らすと、三十代半ばの艶っぽい女が出てきた。
縦に緩くパーマがかかった茶髪。切れ長の瞳にスッと通った鼻梁。形のよい唇には鮮やかな赤いルージュが塗られている。
胸元が大きく開いたチュニックから、豊かな双丘の膨らみが作り出す深い胸の谷間が露わになっていた。
さらに驚くほど丈の短いスカートからは黒いストッキングに包まれたムッチリとした太ももやそこからくるぶしに向かって続く美しいレッグラインが露出している。
人妻とは思えないほど露出の多いその格好は、熟れた三十代女性ならではの色香を醸し出していた。
「畑野彩香よ、よろしくね」
瑞穂たちが引っ越しの挨拶をすると、彼女――彩香は艶やかな笑みを浮かべた。
「分からないことがあったらなんでも聞いて。人と人のつながりが強いのが、田舎のいいところだから」
「ありがとうございます、畑野さん」

「彩香、でいいわよ。私も瑞穂さんって呼んでもいいかしら」
艶然と微笑む彩香。
話によると彼女は関東地方の出身で、瑞穂と同じく夫との結婚を機にこの村に引っ越し、数年になるという。
当初は環境の違いに戸惑うこともあったが、今ではすっかり慣れて、ここの生活を堪能しているのだとか。
「この村は若い女の人が少ないのよ。だから瑞穂さんみたいな人がお隣に来てくれて嬉しい」
「じ、じゃあ……彩香、さん」
初対面でいきなり名前を呼ぶというのはどうにも慣れないが、相手が瑞穂を名前で呼んでいる以上、拒否するのも変だ。
彩香は嬉しそうににっこりと笑みを深めた。
「それに若い女性が増えるとこっちの負担も少なくなるし。助かるわ」
「負担？」
「……ああ、村の行事の手伝いとかそういうやつよ。こっちは都会と違って若い人が少なくて色々大変なの」

一瞬だけハッとした顔になった後、彩香は笑みを深くする。
（彩香さん……？）
何かを誤魔化すような態度が、少しだけ気になった。

その後、彩香に別れを告げて、瑞穂と正一は今度はもう一軒の隣家に向かった。
「どう、瑞穂。仲良くやっていけそうかな？」
「ええ、旦那さんには会えなかったけど、彩香さんはすごくいい人そうだし。きっと大丈夫よ」
瑞穂が笑ってうなずくと、正一は安堵したように息をついた。
彼女が慣れない田舎暮らしで精神的に辛くないか、心配しているのだろう。
そんな夫の優しさが彼女には愛おしかった。
と、
「おや、正一くんじゃないか。こっちに帰って来ていたのか」
前方から歩いてきたのは、がっしりとした体格にカーキ色のジャンパー、くたびれたTシャツ、紺色のスラックスという格好の中年男だった。角ばった顔に太い眉という風貌がいかにも精力的な印象を受ける。

「あ、今から挨拶に伺おうと思っていたんですよ」
「ははは、今日からこっち住まいだったな。まあよろしく頼む」
郷田と名乗ったこの男は、畑野家とは反対側の隣家に住んでいるそうで、年齢は四十を超えているようだ。
「あんたの旦那は子供のころから知ってるよ。昔はよく遊んでやったもんだ」
「そうなんですか」
「いやあ、あの正一くんがこんな美人を嫁さんにもらうなんてな」
郷田は感慨深げにつぶやきながら、ちらり、ちらり、と瑞穂に視線を向けてくる。
その視線の位置が顔から胸、腰へと段々に下がっていくのを感じ取り、彼女はわずかに顔をこわばらせた。
「正一くんは奥手だからな、あっちのほうも奥さんがリードしてあげないと」
「えっ」
明らかに夫婦生活を示唆する言葉に瑞穂はさらに表情を硬くする。
もしかしたら聞き間違いだろうか？
だが郷田の顔に浮かぶ下卑た笑みは、内心の問いかけを否定していた。
と、瑞穂の顔色が変わったのを見て、さすがに彼もばつが悪そうに、

「おっと失礼。へへ、ついそっちのネタに走っちまうのが俺の悪い癖なんだ。まあ許してくれよ」
「い、いえ」
どうやら悪気はないようだった。
とはいえ、いかにも淫猥な話が好きそうな郷田に瑞穂はあまりいい感情を抱けなかった。
子供のころから夫と親しんできた男なのだから仲良くしなければ、と頭では分かっているのだが――。
「けど、それだけ色っぽい体してるんなら男が放っておかないだろう」
「ど、どういう意味ですか」
「いやいや、結婚前は意外とお盛んだったんじゃないかってね、はは」
「っ……！」
瑞穂は表情をこわばらせて絶句した。
その美貌とは裏腹に、彼女には派手な男性経験などない。夫と付き合うまで男を知らない清らかな体だったのだ。
だが、それを赤の他人に――しかも初対面の男に詮索される謂(いわ)れはなかった。

（いくらなんでも失礼だわ！）
温厚な瑞穂だが、さすがにカッとなった。
郷田の好色そうな視線が自分の体を這い回るのも不愉快だった。人妻である自分が視線だけで嬲られ、汚されていくような不快感。
とはいえ、これから隣同士になる以上、あまり邪険にするわけにはいかない。
都会の希薄な隣人付き合いとは異なり、田舎のそれはもっと濃密なはずだ。瑞穂は不快感を無理やり抑えこみ、にっこりと愛想笑いを浮かべたのだった。

「お祭りの手伝い？」
その日の夜、引っ越しの荷物もあらかた片づけ終わり、ようやく人心地をついたところで正一がその話を切り出した。
「ああ、豊稲祭っていって、この村では毎年三月の終わりにお祭りがあるんだよ。そこで五穀豊穣を祈る儀式をやるんだけど、その巫女役は村の女性が務めるんだ」
「もしかして、それを私に……？」
「さっき村長から電話があって是非って頼まれたんだ。まだ本決まりじゃないけど、もし頼まれたときはお願いできないかな？　もちろん嫌なら強制はしないよ」

「嫌だなんてことはないわ。ただ巫女さんの格好なんてちょっと恥ずかしい」
「瑞穂の巫女姿、きっと綺麗だと思うよ」
「まあ」
夫の言葉に瑞穂は思わず頬を染めた。
ちょっと照れくさい思いはあるのだが、正一が期待してくれているのなら、巫女服を着るのも悪くない。
「私でよければやってみるわ」
「そうか。ありがとう、瑞穂」
瑞穂がにっこりと微笑むと、すぐ傍に夫の顔があった。
自然と互いに顔を寄せ合う。
「んっ……」
瑞穂はうっとりと夫の温かな唇の感触に浸った。愛する男性との心地よい口づけに体中が蕩けそうになる。
――正一くんは奥手だからな、あっちのほうも奥さんがリードしてあげないと。

不意に、昼間の郷田の言葉が脳裏に甦った。
その言葉が思わぬ引き金となったのか、腰の奥がキュンと疼く。子宮が軽く悲鳴を上げるような感覚。
そういえば、引っ越しの準備で忙しかったこともあり、もともと淡白気味だった夫婦生活はこのところ随分とご無沙汰だった。
やがて唇が離れると、瑞穂はトロンと目を潤ませて正一を見つめる。
久しぶりにこの人に愛されたい。心だけでなく、体も。
「あの――」
「明日は早いからそろそろ寝るよ」
瑞穂の言葉を遮るように正一が微笑んだ。
彼の勤務先はここから車で一時間ほどかかる。通勤時間のことも考え、早めに就寝する必要があった。
「……そうね」
瑞穂は、声に落胆の色が混じらないよう注意を払う。
正一と付き合うまで処女だった彼女だが、今では性の喜びも多少は知っていた。
イクというのは話で聞いたことはあっても、実際に経験したことがない。けれど、

ゆったりとした心地よさや快感は分かる。
何よりも愛する人と一つにつながるという行為そのものが、瑞穂にとっては幸せだった。
とはいえ、夫も引っ越し作業の疲れが残っているだろうし、会社の仕事もある。自分の欲求よりも正一の体のほうがはるかに大事だ。
「私も寝るわ。お休みなさい、あなた」
「ああ、お休み」
短い挨拶を交わし、それぞれの布団に入る。
瑞穂はなかなか寝付けなかった。
いったん期待して、ぼんやりと熱の宿った女体は——自分でも驚くほど鎮まるのが遅かった。
もぞ、もぞ、と半ば無意識に布団の中で体をくねらせてしまう。
(嫌だわ、私ったら……エッチな気分になってる……)
ネグリジェの上からそっと股間に指先を押し当てた。
そこは温かく火照っていた。

稲盛村での新生活を始めて一週間が過ぎた。
毎朝出勤する夫を見送り、その後は家事に勤しむ日々。田舎特有のゆったりと時間が流れる感覚にも慣れた。都会のせわしなさよりもこっちの空気のほうが瑞穂には性に合っているかもしれない。
その日の夜――。
板敷きの寝室で寝ていた瑞穂は、がさ、ごそ、と断続的に響く物音にハッと布団から身を起こした。
喧騒にあふれた都会と違い、田舎の夜は静かだ。
それだけに不審な物音は広い一軒家に異様なほど大きく響き渡った。
（何の音かしら？）
瑞穂は怪訝な思いで眉をひそめる。
がた、ことん、と音がいっそう大きくなった。
音の発信源は明らかに家の中だ。
誰かが家の中にいる――!?
湧き上がった疑念が不安となって背筋を震わせた。
瑞穂は息を殺し、気配を窺う。

がたこと、がたごと……気のせいか、物音はだんだんとこの部屋に近づいているように思えた。

（ど、泥棒……!?）

もしかしたら障子戸の向こう側に不審者がいるかもしれない。

音を立てないように、そろりそろりと布団から這い出る。

二月の夜気がネグリジェを通して肌を刺すように冷えた。実際、この格好で寝るのは少し寒い。しかし夫が瑞穂のネグリジェ姿をいたく気に入ってくれているため、いつも身につけるようにしているのだった。

薄い生地でできたネグリジェは、パンティを身につけただけの瑞々（みずみず）しい肢体にぴったりと貼りつき、丸く膨らんだ乳丘や見事にくびれた腰、そしてパンと張ったヒップに至るまで、凹凸のはっきりとしたボディラインを浮き上がらせている。

豊満な乳房は内側からネグリジェの生地を力強く押し上げ、よく見れば乳首の形がうっすらと浮き出しているのも確認できるだろう。

剥き出しになっている両肩のなだらかなラインや露わな鎖骨、そして垣間見える深い胸の谷間は薄暗い家の中という空間に溶けこみ、妖しいエロスを醸し出している。もちろんそのエロスを堪能できる相手は愛する夫一人だ。

（こんなときに限って、正一さんがいないなんて）

瑞穂は歯噛みした。

そう、夫は今日から二泊三日で出張なのだ。現在、この広い一軒家には瑞穂しかいなかった。

薄いネグリジェの下はパンティだけという無防備な格好も相まって、不安感が増幅する。ほとんど反射的に両腕で自身の体をかき抱いた。

瑞穂は寝室から板張りの廊下に出ると、足音を忍ばせて物音がするほうに近づいていく。

ぎし、ぎし、と床板が一歩歩くたびに軋んだ。その音が夜の静寂の中でやけに大きく響き、泥棒に気づかれるのではないかと気が気ではなかった。

とにかく状況を確認しなければならない。警察を呼ぶなり、近隣に助けを求めるなり、行動を起こすのはそれからだ。

一歩、また一歩、と進んでいく。

心臓がさっきから早鐘を打ちっぱなしだった。背中からはぬるい汗が滴り、薄いネグリジェが肌に貼りつく。

廊下を進み、やがて奥の一室にたどり着いた。二人暮らしのため家の中には使って

いない部屋がいくつかある。ここもその一つだった。
障子戸をゆっくりと開くと部屋の中は薄闇だった。雲に月が隠れているらしく、窓からほとんど明かりが入ってこないのだ。
「だ、誰ですか!?」
声を震わせながら、前方に向かって誰何した。
返事は、なかった。
思いきって部屋に入り、さらに前へ進む。
両膝がガクガクと震えているのが分かった。
さらに一歩、もう一歩。
勇気を振り絞って進む――。
がた、ごと。
「えっ……!?」
瑞穂は拍子抜けしてその場に立ち尽くした。
眼前には木でできた窓枠があり、時折がたがたと揺れている。
瑞穂はようやく理解した。そう、先ほどからの不審な物音は、建てつけの悪いこの窓枠が風でがたついているだけだったのだ。

知ってしまえば、どうということはない話だった。幽霊の正体見たり枯れ尾花とはこのことだろう。

「私ったら早とちりして……」

瑞穂は大きく息を吐き出した。

慣れない土地に来て、少し神経過敏になっていたようだ。緊張していた全身が急速に弛緩する。

――ホッと気を抜いて、油断が生まれたのかもしれない。

不意に背後から誰かに抱きすくめられた。

「っ……!?」

突然のことに瑞穂は反応できない。

太い二本の腕で上半身をギュッと抱きしめられた状態のまま立ち尽くす。

一体誰が？

どうして？

どこから入ったの？

無数の問いが脳内で交錯し、半ばパニック状態に陥る。それでも危機回避の本能が瑞穂の体をほとんど無意識に動かしていた。

「きゃあっ!?」
悲鳴混じりにその腕をはね除けると、前方に転がるようにして不審者から距離を取る。
大慌てで振り返ると、暗がりに真っ黒なシルエットが見えた。
がっしりした体格から察するに、どうやら男のようだ。
さっき感じた物音は錯覚などではなく、外の風の音でもなく――彼のものだったのだろう。
暗くてはっきりと見えないが、それでも男が笑みを浮かべたのが気配で分かる。まるで獲物を狙う肉食獣のような気配。
ふーふー、と荒い息を吐き出しながら、男がゆっくりと近づいてきた。
「だ、誰かっ……誰か来てぇぇっ……!」
恐怖のあまり、か細い悲鳴を出すのがやっとだった。
しかも両隣までは距離があるため、この程度の声量ではまったく届かないはずだ。
男が一息に間合いを詰め、瑞穂を抱きすくめた。あっという間に板敷きの床の上に組み伏せられてしまう。細身の夫とはまったく違う、筋肉質で重量感のある体がのしかかってきた。

両手を掴まれてバンザイのポーズに固定され、抵抗を封じられたまま熱い息を胸元に吹きかけられる。
瑞穂は恐怖にかられながら相手を見た。これだけの至近距離でも男の顔ははっきりと見えなかった。都会と違って周囲から明かりが入ってこず、月も雲に隠れているせいだ。
「や、やぁっ……」
「騒ぐなよ」
くぐもった声で告げた見知らぬ男がネグリジェの裾に手をかけると、乱暴な手つきで鎖骨辺りまでたくし上げた。
「あ……」
夜の空気が肌に当たり、ひやりとなる。
仰向けになってもほとんど潰れないお椀型の見事なバスト。Gカップを誇る乳房はまったく型崩れしておらず、二十五歳という女盛りの年齢もあって夜目にもその白さが眩しい。
乳首はまるで処女のように清楚な淡いパールピンクで、健康美と新妻の色香が同居した色遣いだ。

「い、嫌……！」
見知らぬ男に裸の乳房を見られている――羞恥と恐怖がない交ぜになった心地で瑞穂は必死に体をよじらせた。
下劣な視線から乳房を隠そうというせめてもの抵抗だった。
だが両腕を封じられている以上、その動きはほとんど意味を成さない。豊かな乳房が上下にバウンドし、左右に柔らかく揺れ動いては淫靡にフォルムを変えていくたび、男の双眸がいっそう強くぎらつく。
柔らかさと弾力を絶妙のバランスで兼ね備えた二十五歳の丸い乳房は、ぷるん、ぷるんと勢いよく震えながらひしゃげ、完璧な球形から縦長に、扁平に、絶えず形を変えていく。
その動きの一つ一つに熱い視線が注がれているのを感じた。これでは男の目を楽しませるだけだと悟った瑞穂は諦めて身動きを止める。
それにしても、この男は一体何者なのだろうか。
強姦魔という言葉が脳裏をよぎり、背筋がゾッとなる。唐突に訪れた貞操の危機に瑞穂はますます体をこわばらせた。
「いやらしいおっぱいしてるじゃねぇか。初めて会ったときから、いい体してると思

ってたんだよ、へへ」
ハアハアと荒い息遣いが胸元に近づいてきた。
「……！」
初めて会ったとき、という台詞に、いつもの瑞穂なら相手が知人であることを疑ったはずだ。しかし緊張と混乱でパニック状態の今は、そこまで思考を巡らせる余裕がなかった。
柔らかいプリンのようにプルプルと震える双丘に男が顔を寄せた。
みちっ、みちっ、と豊かな乳肉が軋むほどの強さで揉みしだきながら、乳首に舌を這わせてきた。
「や、やめてぇっ……」
か細い悲鳴がほとんど無意識に漏れ出した。
ヌメヌメとしたおぞましい舌肉が乳首に巻きつき、ギュッと絡みついてくる。柔らかな乳首を強く絞られ、痛いと感じるギリギリのところで解かれると、今度は舌先で転がすようにしゃぶってくる。
唾液をたっぷりと塗りたくられ、ぴちゃ、ぴちゃ、と響く水音が見知らぬ男に乳首を思う存分舐められているのだという屈辱感をさらに煽った。

ただひたすらに、気持ちが悪かった。
（嫌よ……こんなの、駄目！）
意識の中が暗い気持ち一色に染まり、瑞穂は意識を正常に保とうと強く歯噛みして耐え忍ぶ。
不審者の舌が、夫以外に触れてはならないはずの乳房を好き勝手に舐めしゃぶっているのだ。
怒りと屈辱で全身に鳥肌が立った。
男は相変わらず思うさま瑞穂の乳丘を唇と舌で存分に味わっている。
そこに受けた舌の感触は、夫婦生活がご無沙汰だったこともあり、本当に久しぶりに味わうものだ。しかし、それをもたらした者が夫ではなく不気味な侵入者だという事実が悔しくてたまらなかった。
（ああ、どうして私、こんな目に遭っているの……!?）
これが夫による愛撫なら今とは正反対の気分だっただろう。全身が歓びに震え、愛する男性に身も心も委ねることができただろう。
男の口と舌が豊満なバストの丸みに沿って無遠慮に這い回った。
唾液と息遣いが乳肌を濡らし、くすぐり、さらに歯を立てられて甘噛みまでされて

しまう。
まるで、この体は自分のものだとマーキングするかのような汚辱の刻印に、屈辱感がカッと燃え上がった。
「へへ、おっぱいたまんねぇな……こんないい体をした女、村には他に一人しかいないぜ……」
くぐもった声で興奮を露わにした男は乳首を口に含み、甘噛みしつつ、もう片方の乳肉も力強く揉みしだく。舌と指で左右のバストを同時に責められ、胸の芯にじわりとした熱が宿った。
そのとき雲間から月が顔を出し、男の姿を淡く照らした。顔は逆光でよく分からないが、がっちりした体にジャンパー、くたびれたTシャツ、スラックスという格好だ。奇妙に既視感のあるそのシルエットに瑞穂はようやく不審な思いを抱いた。
と、男は双乳への責めを続けながら、スラックスのジッパーをかちゃかちゃと下ろしてペニスを露出させた。
ばね仕掛けのように飛び出したモノの硬い先端部が太ももの内側をツンツンと突いてくる。
「ううっ……」

久しぶりに肌に感じる男性器は、温もりも硬さも明らかに正一とは違っていた。
愛しい夫のものならともかく、見知らぬ侵入者の感触はただおぞましいだけだ。腿に感じるヌルリとした体液は肉茎から漏れ出るカウパーだろうか。ぷん、と男臭い匂いが鼻を刺し、汚辱感を煽る。
「まあ、そう嫌がるなよ……楽しもうぜ、お互いに……」
ぶちゅ、ちゅぱっ、と新雪を思わせる両の乳房に口づけの雨が降った。
「だ、駄目っ」
逃れようにも組み伏せられた状態ではどうにもならなかった。乳肉の丸い膨らみに沿って唇が這い回り、先端部の乳首をかぷっと咥えられる。男の唇が押しつけられた場所が熱く火照り出した。
（いや、こんなのって――）
不審者への恐怖感と、夫以外の男に乳房へのキスを許しているという罪悪感がない交ぜになって新妻の理性を激しく揺さぶる。
不意に瑞穂はあることに気づき、表情をこわばらせた。
（この声――）
どこかで聞き覚えがある気がした。それもつい最近のことだ。

先ほど覚えた不審とその情報が合わさり、彼女の頭の中で一つの推測が組み上がり始める。
「キスしようぜ、へへ」
その思考を中断させるように、男が乳房から顔を上げて瑞穂に顔を寄せてきた。そのまま一直線に瑞穂の唇を狙って尖った口を近づけてくる。
唇に熱い息を吹きかけられ、彼女は反射的に顔を背けた。
ぶちゅっ、と汚らしい唾液の音を立てて、肉厚の唇が頬に押しつけられた。
「ああ……」
ぬめぬめとした唇が頬の辺りを這い出す。まるでナメクジを貼りつけられたような不快感に、瑞穂は屈辱の嘆声を漏らした。
さらに男は鼻息も荒く、唇をスライドさせて瑞穂の唇を奪おうとしてくる。心臓がドクンと鼓動を速めた。人妻である彼女が夫以外の男に唇を許すなど、あってはならない事態だ。
「い、嫌ぁっ！」
瑞穂は恐怖も忘れて両腕を思いっきり突っ張り、必死で相手を押しのけた。
男の体重は重い。ずっしりとした手ごたえが両腕にかかる。

さらに力を込めて二度、三度と押した。
「うっ……」
火事場の馬鹿力が働いたのか、男はひるんだように身を仰け反らせる。全身にのしかかっていた重みが消え、瑞穂はようやく自由を取り戻した。
まだ体に力が入らず立ち上がることもできない彼女は、その場に腰を抜かしたまま男を見上げる。
ジッパーの隙間から外に出ている肉棒は信じられないほど巨大で、しかも臍にくっつかんばかりに急角度でそそり立っている。
「何、これ……!?」
驚くほど雄大な逸物に瑞穂は息を呑んだ。
彼女が知っている男性のペニスはもっとサイズが小さいし、こんなにも高々と反り返ったりしていない。
「おいおい、さっきからガン見だな。俺のチンポに見とれてるのか、奥さん？」
苦笑交じりの声を漏らす男。
瑞穂は聞き覚えのある声にふたたびハッとなった。記憶をたどり、ようやく先ほどの疑問に答えが閃く。

「えっ、まさかあなたは――」
ちょうどタイミングを計ったように窓から淡い光が差しこんできた。
雲に隠れていた月がまた顔を出したのだろう。青白い月明かりが男のシルエットを照らし出し、瑞穂はその正体を知った。
呆然と息を呑む。
「郷田さん……!?」
瑞穂は声を震わせた。驚きと怒りとショックと――様々な感情が混じり合って胸の中をかき乱す。
「驚かせちまったみたいで悪いな、へへ」
謝りつつも、郷田に悪びれた様子はない。
不法侵入してきたくせに、この態度はなんなのだろう？
自分が何をしたのか理解しているのだろうか？
温厚な瑞穂もさすがに怒り心頭だった。
一方の郷田はジロジロと好色そうな目を彼女の体に這わせている。まるで先ほどの行為の続きをせがんでいるかのように。
ネグリジェを大きくはだけられ、乳房を露出した自分の格好をあらためて意識し、

瑞穂はハッと裾を下ろした。
眉間を険しく寄せて隣人の中年男をにらむ。
「そう怖い顔するなって。今日は旦那もいないんだろう？　バレやしない」
「そんな問題じゃないでしょう！　私は結婚しているんですよ！」
「だからバレないって」
言って郷田がふたたびのしかかろうとしてくる。
瑞穂は両手を突っ張り、男の接近を必死で押し返した。
「やめてください、人を呼びますよ！」
「人を呼ぶ？　どうやってだ？」
「どうって――」
思いっきり悲鳴を上げれば、さすがに隣も気づいてくれるだろう、と考えたところで、瑞穂は愕然となった。
都会のように人が密集している場所とは違い、ここは田舎だ。一軒一軒の家が離れている。どれだけ大声を張り上げたところで、隣家まで届くかどうかは怪しいところだった。
郷田は勝ち誇ったように笑った。おそらく助けを呼んでも無意味だということまで

計算して夜這いをかけたのだろう。
「こっちも溜まってるんだ。すっきりしたら帰るからよ。ちょっとだけ協力してくれねぇか？」
「私には夫がいるんです。そんなこと、できるはずがないでしょう！」
「お堅いねぇ。真面目な正一くんにぴったりのできた奥さんだよ、あんたは」
「と、とにかく出ていってください。非常識ですっ」
必死で言い張る瑞穂だが、郷田はどこ吹く風といったように軽く肩をすくめただけだ。それどころか、喉の奥でくくっと笑い声まで漏らす始末だ。
「溜まってるって言っただろ。おまけに奥さんのこんなエロい格好見たら、いきり立ってしかたねぇ」
ぎらついた好色な視線が自分の体を這い回るのを感じ、全身に鳥肌が立った。
「それに――正一くんだって、これくらいは許してくれるだろ。なんせこの村の出身なんだ。色々と分かってるはずだぜ」
「えっ？」
郷田の言葉の意味が分からず、瑞穂は首をかしげた。
その瞬間、郷田がおもむろに距離を詰め、真上から瑞穂の顔に向かって腰を落とし

てきた。
腰を抜かしたままの彼女は立ち上がる暇も、避ける暇さえもなかった。
熱く火照りきったペニスの先端部が唇に押し当てられる。
「ん、ぐぅっ……！」
そのまま太いものが瑞穂の唇を割って押し入ってきた。
息が詰まるような饐えた匂い。
久しぶりに体感する『男』の味だった。夫よりもはるかに濃密な匂いに、それだけで頭がクラクラとする。
（ダメ、やめて……これ以上入らないわ……！）
口を塞がれて声を出せないため、目を見開いて郷田に挿入の中止を訴える。
こんなにも太く長い物体を口の中に入れた経験など、二十五年間の人生で一度もなかった。太すぎて口が内側から破裂するのではないかと錯覚するほどだ。
が、郷田は腰の動きを止めるどころか、うっとりと頬を緩めたままさらにペニスを押し進める。
新妻の口腔を蹂躙する勢いで、太幹がどんどんと押し入り、思わずえずきかけたそのとき、こつん、と亀頭が喉の最奥に当たった。

「んんんっ……ふぐぅ」
熱く火照った肉根は瑞穂の小さな口を内側から押し広げ、顎が外れそうなほどの圧迫感だ。
吐き出したくても吐き出すことができず、瑞穂は涙目で呻いた。
「奥さんの口、あったかいな。こうしてるだけで気持ちいいぜ」
苦悶の彼女とは裏腹に、郷田は満悦のため息を吐き出す。
夫との性生活ではほとんど経験のないフェラチオだった。
しかも生まれて初めて夫以外のペニスを口に咥えてしまった罪悪感が胸の芯を重く押し潰す。
「んぐぐ、ぐ、ふぅ……!?」
悔しさと悲しさと怒りと絶望が渾然一体となった複雑な感情のうねり。その感情に浸る間もなく、郷田が腰を揺らし始めた。
じゅぽっ、じゅぽっ、と湿った音を立てて唾液を飛び散らせながら、郷田が熱いものを瑞穂の口内に突きこんでくる。
一打ちごとに口腔が張り裂けんばかりに押し広げられた。
「ぐぐぅ、ん、ふ、ふと……すぎ、いぃ……ん、むぅ……」

夫に数少ない口唇愛撫を施したときには、こんな苦しい思いをしたことは一度もなかった。

瑞穂の中でフェラチオの概念そのものが覆されるほど強烈な一撃が間断なく続く。喉の奥にまで届く長大な逸物で連続して突かれ、フッと意識が薄れた。

（嫌っ、こんな……夫以外の人の、咥え……んんっ……！）

口の中いっぱいに巨大な肉塊を頬張らされているため、拒絶の言葉を上げることさえできない。

「駄目だ駄目だ、そんなんじゃ。もっと頬を窄めて俺のチンポを締め上げねぇと」

頭上から郷田が馬鹿にしたように告げた。

ただでさえ爆発しそうになっている感情のキャパシティに、さらにダメ出しの言葉まで投げかけられ、パニックが加速する。

「えっ、な、何……ん、く……んっ……!?」

「絞るんだよ。頬を狭める感じで。ん、できるか？」

さっきまでと一転して優しく諭す郷田。

麻痺状態になっている感情は自然と思考を停止させ、瑞穂はほとんど反射的に、郷田の指示通りに頬を窄めてしまう。

狭まった口内の粘膜が太い肉竿と密着を深める。望まぬことながら憎い男の性器の形状や熱をより感じてしまう結果となった。

（熱い！　それに太くて、硬いわ……！）

不快感とは裏腹に、感動にも似た心地が女の芯をズンと突く。

全身で『牡』であることを自己主張しているような――欲望の塊のような巨大な肉棒だった。これに比べれば、夫のペニスサイズはそれほど大きくないのだと嫌でも思い知らされてしまう。

「もっと先っぽを舐めるんだよ」

郷田は馬鹿にしたように言い放つと、腰を引いていったん剛棒を抜き取った。

口内を占領していた異物から解放され、ようやく呼吸が自由になった瑞穂はハアハアと息をつく。

と、その口元にふたたび熱い切っ先が押し当てられる。膨らんだ亀頭が上下の唇を割ってもぞりと侵入した。

「ん、ぐふ……さ、先……んんっ……？」

先っぽを口に含まされた状態で瑞穂が目を白黒させて喘ぐ。

郷田はそんな彼女をますます馬鹿にしたように、

「おいおい、人妻なのになんにも知らないんだな。旦那からは男を喜ばせる作法を教わらなかったのか？」
「そんな言い方――んっ⁉」
膨れ上がった肉塊がさらに深くまで押し入ってきた。硬い肉の頭で喉奥を突かれ、呼吸が詰まる。
えずきそうになったところで、郷田がゆっくりと腰を引いた。
「んぐ、ちゅ……」
半ば無意識に舌を跳ね上げて亀頭に巻きつける。
舌全体にサラサラとしたカウパーが染みこんできた。
「ちゅぱ、れろ……ぉっ……」
ぴちゃ、ぴちゃ、と本能的に欲望の汁を舐め取ってしまう。
さらに、弾力のある朱唇を亀頭に被せて柔らかく包みこみ、鈴口を舌先で突く。
漏出を増したカウパーが苦みと甘みを同時に伴い、味蕾（みらい）に広がった。おぞましい味わいとともに、胃の底が裏返るような嘔吐感が込み上げた。
気持ち悪い。このまま吐き出してしまいたい。
「ぐっ、ごふぅ……」

ふたたびえずきかけたところで、突然口の中にトロリと蕩けるような甘美な味わいが広がった。

気持ち悪いはずなのに……吐き気さえ感じるほどなのに、自分でもわけが分からない。困惑で体中が震えた。嫌な男の体液でありながら淫靡な味わいが瑞穂の官能をじわじわと炙っているのだ。

込み上げる不思議な衝動のままに、瑞穂は舌をくねらせて口内を占領する肉塊にフェラチオ奉仕を続行してしまう。

ぴちゃ、ぴちゃ、と猫がミルクを飲むときそっくりの音を立て、敏感な亀頭粘膜に舌肉での圧迫を繰り返した。

「ふうっ、いい塩梅になってきたぜ、奥さん。中々飲みこみが早いじゃねぇか」

郷田が気持ちよさそうに呻いた。

同時に猛々しいペニスが不規則に脈を打ちながら、さらにワンサイズ膨れ上がり、瑞穂の小さな口内をさらに押し広げる。

「んんっ!?　ぐ、ふぅ……」

口の中に咥えたモノを反射的に吐き出しそうになったところで、郷田が瑞穂の頭をがっちりと掴んだ。

そのまま固定して最奥まで突き入れてくる。
強制的な口唇奉仕――イラマチオの体勢になり、その圧迫感に瑞穂は目を白黒とさせた。
まるで女の口を、性欲を排泄するための道具としてしか見做していないような行動だ。
こんな乱暴な行為は、優しい夫からは一度も受けたことがなかった。
「はあはあ、そ、そろそろ……うく、くぅ……イキそうだぜ……！」
頭上から郷田の切羽詰まったような声が聞こえた。
同時に腰の動きが速まり、張り出したカリ首で口腔粘膜を激しく擦られる。
その勢いで跳ね上がった舌肉が、深く呑みこんだ亀頭と自然に絡まる。理想的なカーブを描く亀頭の丸みも、ひくひくと開閉を繰り返す鈴口も、大きく張り出したカリ首や溝も、すべて舌先で感じ取ることができた。
火傷しそうなほどの火照りが口いっぱいに広がり、瑞穂は腰の芯に妖しい疼きを感じた。
意に添わぬフェラチオとはいえ、自分の口と舌が男に快感を与え、射精に導こうとしている――。

その実感が女としての自尊心を不思議なほどくすぐり、同時に理性を焼いた。
（な、何を考えているの、私!? 相手は夫じゃないのに――）
そんな彼女の戸惑いにも気づいていないのか、郷田は一方的に腰の動きを加速させていった。ヌルヌルのカウパーを瑞穂の口内に注ぎながら、連続して喉を突き、フィニッシュワークへと移る。
「へへへ、もうイキそうだぜ、奥さん！」
「んぐぐ……うぅ……だ、めぇ……んっ」
（来る……！）
もうすぐ男の精を自分の中で受け止めることになる――。
まず湧き上がったのは強烈な忌避感だった。
愛する夫の体液ならばともかく、嫌悪感を抱く男のそれなど口にするのも汚らわしい。
だがこの状況では逃げようがない。その諦念が絶望へと変わり、瑞穂の胸の内を陰鬱に染め上げる。
仕方がない。
受け入れるしかない。

覚悟を決めた瞬間、不意に胸が甘く疼いた。
自分でも説明のつかない不思議な高揚だった。
まさか私は夫以外の男の射精を口で受け止めることに、高ぶりを感じている――!?
（違うわ！　私は嫌なのに、郷田さんに無理やり……）
脳裏に浮かんだ疑問を、理性を総動員して打ち消したとき、郷田が太い雄たけびを上げた。
「くおおおおおおっ、出すぞぉぉっ！」
不気味に脈打つ男根の先端が大きく膨らみ、瑞穂の口の中いっぱいに生臭いスペルマが吐き出された。
口の中を膨張したペニスで占拠されている以上、その噴射を避けることも、吐き出すこともできない。
抵抗不能の飲精を強いられ、瑞穂は目を白黒とさせた。
「ぐぐぅ……んんっ、む……」
ねっとりとした粘性の高い精液が瑞穂の舌に、歯に、口蓋の裏に、そして喉の奥にまで所構わず吹きつけられ、絡みつく。
射精を口で受け止めたのは初めての経験だった。

「ぐうぅぅっ……ん、はぁっ……ごく……んっ」
後から後から注ぎこまれ、口の中を満たしていく熱々のザーメンが意識を甘く吹き飛ばす。やがて最後の一滴まで注ぎ終えると、口の中に収まっている剛棒がぶるぶるっと震え、わずかにサイズを縮ませながら、ずるりと口内から抜け出した。
赤黒い切っ先からまだ垂れている白い粘液が細い糸を引いて自分の唇とつながっている。その光景を呆然と見つめながら、瑞穂は深い息を吐き出した。
飲まされた。
一滴も余さず飲まされてしまった――。
それも、夫以外の男の精液を。
（苦くてどろっとしてるわ……口の中にへばりついて気持ち悪い。男の人の精子って、こんなにもおぞましい味がするのね……）
ハアハアと精臭の混じった息を吐いて呼吸を整えながら、瑞穂は完全にショック状態だった。
と、
「へへへ、まだまだ収まりがつかねぇな。次は下の口にぶち込ませてもらおうか」
郷田が今にも涎を垂らさんばかりの顔で瑞穂を見つめる。

股間にぶら下がる肉根はなおも精液の残滓を滴らせながら、ムクムクと起き上がってきた。驚くほどの膨張率で、あっという間に元のサイズを取り戻してしまう。一度くらいの発射では物足りないという強烈な自己主張だ。

（そんな、さっき出したばかりなのに！）

瑞穂は驚きを隠せない。

夫は性的に淡白で、一度発射してしまえばそれで満足してしまう。

射精したばかりですぐにまた臨戦態勢に入る郷田のペニスは、瑞穂が知っている男の生理からはあり得ないことだった。

「あんただってそうだろ？　どうだい奥さん、今度は本番を――」

「な、何を言っているんですか！」

これで終わったと思ったら、さらに要求をエスカレートさせてきた郷田に対し、さすがに瑞穂も怒りを爆発させた。

フェラチオでさえ耐え難い屈辱だというのに、この下卑た男はよりによってその先の行為――本番セックスを誘っているのだ。

「まあ、そう言うなよ……っと」

「やめて、と言ったはずです」

郷田が伸ばしてきた手を、瑞穂は乱暴にはね除けた。
「も、もう充分でしょう。早く帰ってください」
まっすぐに彼を見据え、毅然と言い放つ。
口の中には未だに精液の苦みが残っていて、不快でたまらなかった。
とにかく一秒でも早く口をゆすいで綺麗にしたい。汚されてしまった口の中を清めたい。
「こんなことを旦那に知られたら……へへ、あの真面目な正一くんには耐えられないんじゃないのか？　夫婦仲に取り返しのつかない亀裂が入らなきゃいいがな」
「まさか、夫にばらすつもりっ？」
瑞穂の顔がサッと青ざめた。
「さあ、どうかな……へへ」
郷田の顔にはどこまでも下劣な笑みが浮かんでいる。
「そ、そんなことしたら承知しませんよ」
「へえ、どう承知しないんだ？　まあ、仮に離婚なんてことになったら俺があんたの面倒を見てやってもいいぜ」
冗談めかしているが、郷田の目は笑っていなかった。

夫と別れてこんな男の妻になるなど――考えただけで怖気が走る。
「帰ってください」
瞳にありったけの怒気を込めてにらむ。
郷田もさすがに興を削がれたのか、
「おうおう、気の強いことで。まあ、いいさ。すぐにあんたも自分から俺に股を開くようになる」
軽く肩をすくめると玄関から出ていった。
――すぐにあんたも自分から俺に股を開くようになる。
郷田の捨て台詞が耳の奥に残って、ざわつく。
「そんなこと、あり得ないわ……」
瑞穂は怒りと屈辱で全身を震わせた。
翌日の朝。
瑞穂は目を覚ますなり洗面所に駆けこみ、口をゆすいだ。

唇に、歯に、舌に、冷水を浴びせて清める。
昨日の夜も郷田が去った後で何度も洗ったのだが、それでも気持ち悪さが消えることはなかった。
（私、なんてことをしてしまったのかしら……）
鏡に映る顔はわずかに青ざめ、唇は血の気を失ったままだ。
昨日の記憶は脳裏に生々しく残っていた。
口の中に感じた郷田のペニスの質感や乳房を舐め回されたときの感触、そして口内にたっぷりと注ぎこまれた濃厚な牡のエキスの味までもが――。
と、そのとき玄関先からジリリ……と電話のコール音が鳴った。
「もしもし、瑞穂？」
玄関まで行って黒い固定電話を取ると、受話器の向こうから愛しい夫の声が聞こえてくる。
「昨日は会えなくて寂しかったよ。出張が終わるのが待ち遠しい」
「え、ええ……私も、よ」
声が震えるのを抑えられない。
正一に会いたいという気持ちに偽りはないが、彼を裏切って別の男に乳房へのキス

を許し、ペニスを頬張っていたのもまた事実なのだ。
夫への申し訳なさで心が引き裂かれるような思いだった。
「あなた、あの……私……」
「ん、どうした、瑞穂？」
目まいを覚えるほど動揺していた。
あらためて夫への罪悪感が甦る。
（駄目よ、瑞穂。昨日のことは忘れなくちゃ。夫に知られてはいけない――）
必死で自分を叱咤するものの、動揺を抑えることができない。
電話を握る手のひらにジワリと汗がにじむ。
「本当にどうしたんだ、瑞穂？　具合でも悪いのか？」
「ち、違うの、なんでもないわ……」
はあっ、とため息を一つつく。
「あ、そういえば、郷田さんから村長の伝言を受けてたんだ」
「えっ」
突然の夫の言葉に息が詰まった。
「ご、郷田さんがどうかしたの……!?」

我知らず声が震えてしまう。
もしも、郷田が昨日のことを夫にバラしたら――。
恐ろしい想像が脳裏をよぎり、瑞穂は電話を取り落としそうになった。
「ああ、今度の祭りのことで――瑞穂？」
「ご、ごめんなさい、体の調子が悪くて……後でもう一度……で、電話してもいいかしら」
「そうか？　あまり無理しないで。ゆっくり休んでいて」
「ごめんなさい」
「慣れない土地に来てるんだし、色々と疲れることもあるだろうしね。僕も早めに帰るよ」
どこまでも優しく瑞穂を気遣う夫の言葉がありがたかった。
同時に、そんな夫を裏切ってしまったという思いが罪悪感となり、心の底に鉛のように重く沈んでいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/